



▲佐久間が相手のリズムを崩すために、決定的なハイキックを放つ。このハイキックは、相手のリズムを崩すために放たれたもので、決して決め手にはなっていない。



「ベルトは獲りたい…いや、必ず獲ります。そうしないと立嶋に失礼ですよ!」



▲4月があるので、メチャクチャ浮かれてはいけません。

●採点表

	白	黒	白	黒	白	黒
1 R	9:10	9:10	9:10	9:10	9:10	9:10
2 R	10:10	10:10	10:10	10:10	10:10	10:10
3 R	9:10	10:10	10:10	10:10	10:10	10:10
4 R	7:8	7:8	7:8	7:8	7:8	7:8
5 R	10:10	8:9	8:9	8:10	8:10	8:10
TOTAL	45:48	44:47	44:48			



「一人で出来るだけのことはやってきたけど、結果がこうなりました。以上続けるのはサギでしょう。今年、僕に正月が来る前に、自分にトドメを刺す方向に行かなければいけなくなりました。スポーツ新聞でも見て、職探しでもしますよ…」(立嶋)

▲判定勝ちが告げられると、拳を突き上げて大喜ぶる佐久間。

この試合のキーポイントは、この初回にあった。そのキーポイントとは、①単発に終わる立嶋に対して佐久間は必ず連打を返していく②サウスポーがオーソドックスの相手の右ストロークに対する定石である左ストロークが、立嶋の右に対して必ず出ている③左ハイキックを狙って打っていた。以上の3点である。

これと全く同じ方法で、立嶋に勝ったサウスポーがいた。佐藤孝也である。佐藤は前述の3点をスマートにこなし、佐久間はいさゝか難ではあったがその分、長いリーチという佐藤にはない武器があった。

初回終了間際、立嶋の悪夢が始まりを告げた。立嶋の飛び込みざまの右ストロークに、佐久間の左ストロークがカウンターでヒット、立嶋の足がふらついたのである。

2、3回はほぼ互角の攻防が続いた。佐久間は左ミドルからスト

# KICK KÖVER IV 悪夢は四度もやって来た… 立嶋またも敗れる!!



▲サウスポーの佐久間の左ストロークが、確実に立嶋を寝かしていき、立嶋は口で佐久間を避ける。左フックで初ダウンを奪ったが、初回終了間際にカウンターをもらった立嶋は足元がはずつかなかった。



最初にダウンを奪ったのは立嶋のほうだった。



佐久間のミドルを軸に繰り出すコンビネーションは有効だった。

「立嶋の斬りつけるポーズに横に斬りつけて対抗したのは、俺の左ミドルを斬る」といふ意味ならたんとする」といふ。

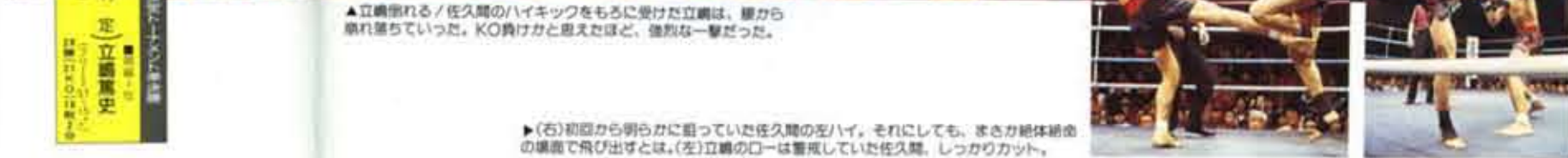
明まさか、立嶋が負けるわけがない。戦前の予想ではそう言われながらも、「まさか」は3度も起こった。

3度も過去の例があれば、それはもう大番狂わせと言えるものではない。しかし、立嶋の場合は3度も「まさか」の出来事だった。それだけ立嶋の実力は評価されてきたことだが、今回は、まさか、まさか、まさか、との声が、多量に響いた。

佐久間は戦線を見る限り、典型的な一発屋だ。一発が入ればKO勝ち、逆にいえばKOで負けてしまうという選手だ。だからこそ、立嶋にとって4度目の悪夢が起



立嶋倒れる。佐久間のハイキックをもろに受けた立嶋は、膝から倒れ落ちていった。KO負けかと思えたほど、強烈な一撃だった。



▲初回から倒れかかっていた佐久間の左ハイ。それにも、まさか絶体絶命の横面を飛び出すとは。(左)立嶋のローは警戒していた佐久間。しっかりカット。

「早くやりたい。夜が来るのが楽しみです。」

試合当日、午前10時から行なわれた練習終了後、佐久間にコメントを求めるとこの言葉が返ってきた。彼の表情は自信に満ちあふれていた。というわけではなかったが、決して強がりやを言っているようなふうでもなかった。

「ちょっと前までは緊張してたんです。でも、きつい練習を終えた。3日前から早くやりたいという気持ちになりました。」

きつい練習に耐えられることが出来たから自信がついたんですか、と聞く佐久間は「そうですと、ハッカリした口調でうなずく。立嶋とは前からやりたいと思ってたんです。」

「気持ち強いんですね。ガンガン自分のパンチが入っても、出て来るんじゃないかと思えば、怖いのはローとヒジ。それ以外は別に、特に変わった練習をやったわけじゃないですよ。いつもどおりやれば勝てます。」

立嶋というビッグネームを相手に、特別な感情はないんですか、一番聞きたかったことを聞いてみた。

「いや、別に。いつもは横面緊張感があるんですけど、今日は心地いい緊張感があるんですよ。後はリングに上がった立嶋の顔を見たとき、あがっちゃったから勝てないですね。あがっちゃったから勝てない。いつもは、結構あがっちゃうんですよ。」

勝てると思います。とは彼は一度も言わなかった。彼の口から出るのは「勝てます」という断言だけだった。

これまでに、3人の選手が「まさか」の場面を現実のものにしていく。前田泰作、佐藤孝也、鈴木秀

りうる可能性は大きかった。

★ビッグマッチの恒例となったホール側からの選手入場。佐久間はセコンドも引き連れず、一人で階段を降りてきた。これは「一人で来た方が目立つから」との理由だと、佐久間は「立嶋の顔を前にして、なんという強心臓、佐久間はさらに、選手コールの原の立嶋が斬りつけてくるポーズに、胸を横に斬りつけるポーズで対抗した。俺の左ミドルで斬ってやる」といふ意味だったんです。

(佐久間)

これまでのKO勝ちほとんどがパンチだったため、パンチが得意というイメージのある佐久間だが、本日は腕の方が得意だといふ。言葉どおり、佐久間は左ミドルを突破口に試合を組み立てていく。

対する立嶋は、パンチ中心の攻撃。得意のローも出るが警戒していた佐久間は落ちついてカットしていた。立嶋は落ちついてカットして、立嶋がパンチを一発出せば、佐久間は2発3発と手数を出して応戦する。